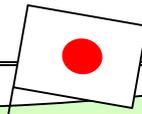


JSPS Japan society for the promotion of science Stockholm office  
 日本学術振興会 ストックホルム研究連絡センター



## ストックホルムセンタ だより 第4号

### 1. はじめに

2004年4月にJSPSストックホルムオフィスの所長に任命されて早や5ヶ月余が経過しました。この間4月下旬にはヨーテボリ大学で開催したコロッキウム(「現代日本社会」(北欧現代日本社会研究会とJSPSの共催、センターだより1号に掲載)、6月には井上博充日本学術振興会監事にも参加いただいたウプサラの森の中でのコロッキウム(「RNAバイオロジー」、6月16日開催)とシェラトンホテルでの志村令郎前所長との交代レセプション(6月17日開催)等がありました(センターだより3号に掲載)。レセプションでは大塚清一郎在スウェーデン特命全権大使、Hans Wigzellカロリンスカ研究所前学長、Gunnar Öquist スウェーデン王立アカデミー事務総長、JSPS同窓会メンバーの方々、その他多数の関係者とお会いする好機となりました。初めてスウェーデンを訪れた4月下旬は北欧ではまだ早春で巨木の梢で芽生えが始まろうとしていました。ビザ取得後6月から本格的にスウェーデンで滞在を始めて3ヶ月余、長い日照時間と心地よい気温に恵まれた北欧の素晴らしい夏を経験しました。この地では6月末から8月半ばまでは人々が夏季休暇をとりキャンパスから消える季節であることを知りました。北欧の夏休みは8月半ばには終わりキャンパスに人々が戻り始めます。8月24日-25日にUT(University of Tokyo) Forumが開催され東京大学から総長を始めとして学生を含め総勢70人が来瑞されました。またEuro Science Open Forum 2004が8月25日-28日にストックホルム市で開催され、日本から尾身幸次議員、黒川清日本学術会議会長が来瑞され講演をされました。JSPSストックホルムオフィスも会場にブースを出し、JSPSの活動、来日する留学生への奨学金、研究者へのフェローシップ等の紹介を行い、200名余から資料請求を受けました。スウェーデンと日本とは北欧と極東のきわめて遠い二国ですが学術技術の交流は年毎にグローバル化しておりJSPSストックホルムオフィスの役割の重要性を感じております。ストックホルムオフィスでは10月13日にはカロリンスカインスティテュート(KI)のノーベルフォーラムを会場とし「生命科学の最先端」と題するフォーラムを開催すべく準備中ですが、これが更なる交流を推進することを期待しております。

現在研修生の努力により、JSPSのフェローシップで滞日を経験者された方々(同窓生)の組織化にむけての取り組みが始まっております。これらの方々は日本への留学を希望する人にとっては日本を知る窓口として、またJSPSにとっては交流のあり方を考える上で大変に貴重な存在であります。

JSPSのオフィスはカロリンスカインスティテュート(KI)の敷地の一角にあります。KIはスウェーデンでトップの医科大学、世界の2000の大学のなかでヨーロッパでは6番目、世界で39番目にランクされるとの報告を最近目にしました。従ってJSPSのオフィスは理想的なロケーションにあるといえます。KIは豊かな自然の中に統一のとれた建物が点在する美しいキャンパスを持っております。スウェーデンは研究と技術革新にヨーロッパでもっとも良い環境を提供している国であると言われていたことが実感されます。

日本とスウェーデンは国土のサイズはほぼ同じですが人口はスウェーデンが日本の1/12です。ほとんどが平地からなるスウェーデンでは空間の広がりや何処までも続いていると感じます。ストックホルムは全人口の10%が住む大都会ですが、日本人の目から見るといかにもゆったりと空間が確保されていて、歴史を感じさせる多くの建物が水辺に存在する美しい街です。私はスウェーデンに福祉国家としても関心がありましたので実際に住むことが出来たのは幸運でした。乗り物や道路はどんな肉体的条件の人でも自立して利用出来る仕組みが整っていて、実効性を重んじる福祉制度に対する取り組みに感心しました。9月に一時帰国して日本のバスや地下鉄を利用して見て、日本では壮健な人を効率よく輸送することには力が注がれているが、様々な条件の人が自立して利用出来る配慮はほとんどされていないことを実感しました。乗り物にも建物にも当然のように数段の階段があり足が不自由である場合や乳母車では途方に暮れます。高齢化を迎えている現在すべての人が自力で暮らせる街造りを期待します。

帰国早々連続する地震(名古屋では震度4、震源地では震度6)と台風にみまわれ日本に帰国したことを実感しました。本年度はすでに7つの台風が本土に上陸したとのことで、今回の台風は最大風速

60メートルを記録した巨大なものでした。死者・行方不明者 44 名が出ており、多くの重要文化財の被害が報告されています。物の哀れを敏感に感ずる日本人は、このように繰り返し日本列島を襲う荒々しい自然の手により育まれたのでしょうか。200 年も戦火に曝されず、地震にも台風にも無縁なスウェーデン、築 200 年の石造建物が現役で機能している国との違いをしみじみと思いました。（岡崎）

## 2. センターの行事・関連イベント

### 8 月 24 日~25 日東京大学が「UT フォーラム」を開催

8 月 24 日及び 25 日の 2 日間、東京大学がストックホルム及びウプサラの 4 大学を会場として「UT フォーラム」を開催しました。この UT フォーラムは、同大学が、先端的な或いは特色ある研究成果を広く世界へ知らせ、世界に開かれた大学としての責務を果たすため、海外で同大学の研究成果の一端を紹介する活動として 2000 年から実施しているもので、今回は第 4 回の開催となりました。

今回のフォーラムは、24 日に環境学系分野（於ストックホルム大学）及び医学・生命科学系（於カロリンスカ研究所）、25 日に基礎科学系（於ウプサラ大学）及び経済・経営系（於ストックホルム商科大学）と 4 つの分野をカバーする大規模なもので、佐々木総長をはじめとする総勢約 70 名の代表団が訪瑞しました。各会場においては、我が国が誇るトップレベルの先生方から最先端の研究成果の発表があり、聴衆を魅了しました。

さらに、今回の大きな特徴のひとつは、比較的交流する機会の少ない双方の博士課程の学生同士（東京大学からは代表団中約 40 名）が、各分野のフォーラムと前後して自分達自身の手で「学生セッション」を企画し実施したことで、これは、互いの研究や社会・文化等について意見を交換し合い交流を深める大変良い機会となりました。

JSPS スtockホルム研究連絡センターは、同セミナーの開催に当たり当地関係大学との連絡調整について支援を行ったほか、23 日にカロリンスカ研究所で開催された医学系分野の学生セッションにおけるパネルディスカッション「Research exchange possibilities between Japan and Sweden」に水田事務官がスピーカーとして参加し、JSPS のフェロースhipを中心とした説明を行いました。

当センターが実施しているフォーラムやコロッキウムと今回の UT フォーラムが、両国学術界の相互理解のために相乗的な効果を発揮するとともに、今後、当会のフェロースhipをはじめとする各事業が、今回構築された人的ネットワークの活性化のために大いに貢献し、両国の研究交流がますます活発となるよう、引き続き活動を充実させていきたいと思っております。（水田）

### 8 月 25 日~28 日 EuroScience Open Forum に参加

2004 年 8 月 25 ~ 28 日、Stockholm Conference Center において、「Euro Science」主催による EuroScience Open Forum が開催されました。これは、初めての汎ヨーロッパの科学会議で、最先端の自然科学、人文科学の紹介、科学的認識の高揚、科学と社会に関する議論の促進を目的として開催されました。4 日間に渡って、自然科学、科学技術、革新に焦点をあてたセミナー、講演、展示等が行われ、世界各国の科学者、政治家、企業、ジャーナリスト、教員等約 1800 人以上がこのフォーラムに参加しました。

当センターは 4 日間に渡ってブースを設置し、ポスターを掲示するとともに、当センターのブローチャーや、フェロースhipのリーフレット等を配布して、フェロースhipを中心とした JSPS の活動を紹介しました。また、10 月に当センターが開催するサイエンスフォーラムの概要とプログラムを配布し、興味のある人にはその場で登録してもらいました。中国、フィリピン等のアジア各国や、ドイツ、ベルギー、ルーマニア等からの来場者が多く、4 日間の総来ブース者は約 170 名、JSPS のフェロースhip経験者が約 1 割でした。フェロースhipに興味のある研究者、実際にフェロースhipに応募する予定の研究者の来訪も多く、その場でフェロースhipの詳細を説明したり、個別の質問に回答したりしました。

このフォーラムでは、8 月 25 日~28 日の 4 日間、「ヨーロッパの科学政策」「人類と宇宙」「健康」等 15 のテーマで 68 のセッションが開かれたほか、8 月 26 日~28 日の 3 日間、特別講演（Plenary Lectures）が行われました。特別講演では、2001 年ノーベル生理学・医学賞受賞者 Dr. Tim Hunt による「細胞サイクルとガン」、ライス大学教授（前米国大統領補佐官）Dr. Neal Lane による「米国ナノテクノロジーイニシアチブの誕生」等 13 人の著名な研究者が講演を行い聴衆を惹きつけました。



（JSPS 事業紹介の様子）

日本からは、尾身 幸次衆議院議員が EuroScience 総会で日本の科学技術政策の現状に関する講演を行ったほか、黒川 清日本学術会議会長が「European science policy in a global context」のセッションでグローバルな視点からの科学技術の位置付け及びアジア地域（特に日本）の位置付けに関する講演を行いました。

黒川先生のプレゼンテーションをはじめ、多くのプレゼンテーションが同フォーラムのホームページに掲載されていますので興味のある方はご覧になってください。（澤登）

（<http://www.esof2004.org/index.asp>）

### 3. JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会会員のインタビュー特集

7月～9月にかけて実施しました JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会会員のインタビューを今回と次回号の2回に分けて特集します。（土屋）

#### 7月6日(火)第1回 JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員へのインタビュー

今回の同窓会員へのインタビューは、昨年1月の同窓会設立後、初めての実施で、JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会の支援活動に好意的な暫定役員を中心に、ほか過去3年以内に JSPS フェロ - シップ事業(外国人特別研究員、外国人招へい研究者等)や KVA (スウェーデン王立科学アカデミー)との二国間学術交流事業で渡日経験のある同窓会会員にインタビューを実施し、JSPS フェロ - シップ事業内容の満足度や研究成果、 瑞日の

#### （参考 インタビュー項目事項）

- ・ JSPS フェロ - シップ事業について  
(事業内容の満足度や研究成果等)
- ・ 瑞日の共同研究や研究者交流について
- ・ 瑞日の研究環境について
- ・ 日本での生活や日本の社会・文化、慣習について
- ・ 同窓会支援活動について

共同研究や研究者交流の課題や 両国の研究環境の比較、考察等を行い、同窓会独自の「ニューズレター」（初刊9月発行）や「当センターだより」に掲載することで、同窓会会員や日本の学術関係者に情報提供を行い、瑞日交流の一層の活性化を目的としています。なお、インタビューの形式は、事前に研究者に質問事項（参考）を照会し、当日はその事項に沿って進め、その後、研究施設を簡単に紹介していただいています。



インタビュー者

（Carlos A. Rubio 氏）

第1回目は、2004年7月6日(火)15時、スウェーデン唯一の国立の医学専門大学であるカロリンスカ研究所の大学病院病理

学部研究室において、同大学病院の助教授で同総会暫定役員である Carlos A. Rubio 氏のインタビューを行いました。

インタビュー者の Carlos A. Rubio 氏は 1981～2003 年にかけて、山際吉田財団ほか KVA(スウェーデン王立科学アカデミー)、スウェーデン医学学会、カロリンスカ研究所、同大学病院の癌学会などの支援により、講演や研究で東京のほか、京都、松山に 13 回ほど渡日しており、日本の文化、特に浮世絵版画に興味があり、日本を「第 2 のふるさと」と思うくらいのかんりの親日家でした。

同氏は、世界最高水準の医学実績のあるカロリンスカ研究所に所属し、客員研究員として日本のほか、中国、米国、カナダ、メキシコ、チリ、アルゼンチン、アイスランド、イングランド、イタリア、スペイン、ニュージーランドなどに赴き、幅広い地域の研究者と交流されています。

#### ～インタビュー者の紹介～

Carlos A. Rubio 氏 (1934 年 2 月 23 日生、スウェーデン人)  
カロリンスカ研究所・大学病院病理学部・助教授兼病理学コンサルタント。

- 1) 研究分野: 胃腸・肝臓の病理学
- 2) 博士の学位: 1974 年、カロリンスカ研究所で「病理学」の博士号取得。
- 3) JSPS 事業での渡日経験
  - ・ JSPS フェロ - シップ事業
  - 1991 年、外国人研究者招へい短期事業で胃癌研究のため、国立ガンセンターの研究所(東京都築地)へ。
  - フェロ - 期間 1 カ月間。受入研究者は T. Hirota 教授。
- 4) 日本での研究に興味をもっている研究者に対するメッセージ  
「Go there with your own ideas !!」



(カロリンスカ大学病院病理学部)

JSPS フェローシップ事業については、大変協力的な受入の先生や多くのアシスタントに支えられ、胃癌研究について期待通りの研究を遂行できたと感謝され、その後も日本との共同研究を実施され、研究成果としてこれまで日本の研究者と共著で約 65 の論文を国際医療ジャーナルに発表されています。



また、大学に対する要望として、瑞日の共同研究の促進や研究者間ネットワークを拡大する上で、すべての大学であらゆるメディアを利用し、瑞日の共同研究や研究者交流の情報発信をおこなうことが大切であるとおっしゃり、当センターの同窓会支援活動に対しては、瑞日の共同研究プログラムの推進につながる活動を期待していらっしゃいました。

約一時間にわたるインタビュー後、Carlos A.Rubio 氏より、現在、日本の研究者から横浜での研究の依頼を受けており、JSPS のフェローシップ事業のど使用のサンプルを提示しての事業に応募できるか、又申請書類について照会があり、パンフレットに基づき、情報提供を行い、最後に、今後とも引き続き連絡をとりながら本年 5 月 17 日(月)に幹事会で合意に至った同窓会支援活動と次回会合に向けて、協力して同窓会を支援していく旨を確認しました。(土屋)

約一時間にわたるインタビュー後、Carlos A.Rubio 氏より、現在、日本の研究者から横浜での研究の依頼を受けており、JSPS のフェローシップ事業のど使用のサンプルを提示しての事業に応募できるか、又申請書類について照会があり、パンフレットに基づき、情報提供を行い、最後に、今後とも引き続き連絡をとりながら本年 5 月 17 日(月)に幹事会で合意に至った同窓会支援活動と次回会合に向けて、協力して同窓会を支援していく旨を確認しました。(土屋)

## 7月15日(木)第2回 JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員のインタビュー



### インタビュー者

(Peter Jan Gunnar BOHM 氏)

第2回目は、7月15日(木)14時、ストックホルム大学経済学部の研究室において、同大学経済学部教授で同総会会員のうち唯一の社会科学系の Peter Jan Gunnar BOHM 氏のインタビューを実施しました。

インタビュー者の Peter Jan Gunnar BOHM 氏は、1985年～2002年にかけて、慶応大学をはじめ、東京大学、大阪大学、京都大学での講義依頼や、セミナー・学会の出席で10回ほど渡日経験があり、日本のジャズ愛好家で、渡日の際は、必ずジャズコンサートに出かけ、母国においてもストックホルムで毎年8月上旬に開催される「日本文化イベント」に欠かさず参加しているとのことでした。また、大の温泉好きで、箱根にもよく赴き、日本庭園をはじめ桜やもみじなど日本の四季折々の美しい自然を愛し、日本茶、お寿司が好物で、受入の飯野先生から郵送される日本茶を毎朝飲む習慣があるなどの、かなりの親日家でした。



(滞在していた(財)国際文化会館の写真の懐かしそうに、見せてくれました。)

滞在中の宿泊先の「財団法人国際文化会館」はお気に入りの場所として3度利用されており、理由として、多くの研究者と交流がもてた点、会館の施設環境の良さ(六本木の閑静なたたずまいにあり、三千坪の回遊式日本庭園で四季折々の日本の美しい自然が観賞できた点)、館内での図書サ・ビスの利用(英文による日本研究書及び人文社会科学分野の雑誌を所蔵している専門図書館

### ～インタビュー者の紹介～

**Peter Jan Gunnar BOHM 氏 (1935年3月30日生、スウェーデン人)**  
**ストックホルム大学経済学部・教授**

1)研究分野マクロ経済学、環境経済論(特に地球環境温暖化問題)、公共経済学、実験経済学

2)博士の学位: 1963年、ストックホルム大学で「経済学」の博士号を取得。

3)JSPS 事業での渡日経験

・ JSPS フェロ - シップ事業

2002年10月に、外国人研究者招へい(短期)事業で、慶応大学経済学部に「地球温暖化対策」の講義、セミナーの依頼を受けて渡日。フェロ - 期間、1カ月間。受入研究者は飯野靖四教授。



(ストックホルム大学経済学部)

があり、研究活動を行なうのに必要な情報やサ - ビスを受けることができた点)、立地条件の良さ(近隣の上野公園での芸術鑑賞や、六本木でのジャズコンサートを堪能できた点)などを挙げられました。同氏の話から、JSPS フェロ - シップ事業を通じて、研究の進展のみならず、日本での有意義な生活を満喫できた様子が伺えました。

フェロ - シップ終了後も、同氏は、受入の飯野先生ほか、大阪大学の西條先生など多くの日本人研究者と引き続き共同研究をされており、飯野先生とは、この9月にストックホルム大学で同氏と一ヶ月ほど、公共経済、環境経済学の意見交換、共同調査を行なう予定でいらっしやいます。

Peter Jan GunnarBOHM氏は、スウェーデンにおける医学やバイオテクノロジー、ナノテクノロジーなど先駆的な分野で、瑞日の共同研究・研究者交流を促進していくことは重要であると考えており、当センターでの同窓会支援活動においても、「瑞日の共同研究の促進につながる研究者間ネットワークの拡大の場」として、今後の活動に期待しており、現在、同氏と同じ専門分野の社会科学系の同窓会会員はいない状況ですが、暫定役員として今後も積極的に同窓会活動に参加することで、会員との情報交換を行なっていきたいとおっしゃりました。

最後に、私の方から、同窓会活動の進捗状況を伝え、第2回の幹事会開催(10月予定)に向けて、引き続き緊密に連絡を取りながら、協力して同窓会を支援していく旨を確認しました。(土屋)

### 7月30日(金)第3回 JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員へのインタビュー -



#### インタビュー者

(Stig G.ALLENMARK氏)

第3回目は、7月30日(金)午前11時より、スウェーデン第二

の都市ヨーテボリにある、チャルマ - ス工科大学において、ヨ - テボリ大学の化学・生物工学部教授で、同総会暫定役員の Stig G.ALLENMARK 氏をインタビューしました。自然を愛し、趣味が山登りという同氏は、1994年から現在に至るまで京都、名古屋、東京、静岡などで開催の国際学会等で渡日経験があり、現在、日本の大学教育や産学連携による共同研究に大変関心を抱いているほか、茶道や生け花などの日本の伝統文化や温泉、ふく料理などに興味があるなどの親日家でした。

JSPS フェロ - シップ招へい(短期)事業については、1991年にイタリアのローマで開催された「国際化学学会」で名古屋大学の岡本佳男先生に出会い、同氏より JSPS フェロ - シップ事業の紹介があり、1997年に来日し、約一ヶ月間の滞在中、同大学ほかいくつかの大学で「有機化学、特にキラリティ(不斉)」に関する講義を行い、



(研究施設現場紹介で、日本製の実験器具を見せられました。)

研究協力者やポスドクの学生と研究討議、意見交換を行うほか、神戸で開催された第16回国際学会(谷口財団主催)に参加し、多くの日本人研究者や学生と交流を深めることができ、瑞日の人的・研究ネットワークの拡大につながる、実りある滞在であったとおっしゃりました。同氏は、フェロ - シップ終了後も引き続き、受入研究者の岡本先生と連絡をとっており、2003年、静岡で開催の「第15回キラリティ国際学会」に参加し、引き続き意見交換をされています。

また、Stig G.ALLENMARK氏は、渡日経験を通じ、両国の大学教育の違いや、両国の産学連携による共同研究に関心を抱き、この点についても岡本先生と意見交換をされており、については、スウェーデンでは、政府が教育への投資に重点をおき、Ph.D学生への財政支援が充実している反面、日本では、Ph.Dの取得の競争率が高く、政府の財政支援がない点が問題であると語られ、については、と対比し技術革新お



チャルマース工科大学  
(化学・生物工学部)

#### ~インタビュー者の紹介~ Stig G.ALLENMARK氏(1936年2月9日生、スウェーデン人) ヨ - テボリ大学化学・生物工学部、教授

- 1)研究分野: 有機化学(特に有機立体化学)
- 2)博士の学位: 1966年、ウプサラ大学で「有機化学」の博士号取得。
- 3)JSPS事業での渡日経験
  - ・ JSPS フェロ - シップ事業
  - 1997年、外国人研究者招へい(短期)事業で、学会参加、講義、意見交換のために渡日。受入研究者は、名古屋大学工学部の岡本佳男先生。フェロ - シップ期間、33日。

いては、日本は政府の財政支援のもとで、産学連携の共同研究を促進する環境が整備されているのに対し、スウェーデンでは、政府の研究面での財政投資不足から、バイオテクノロジーやナノテクノロジーなどのサイエンスの先駆的な国であるものの、産学連携による共同研究を実施する上での研究環境の整備が不十分である点が問題であると指摘されました。

さらに、`JSPS Alumni Club activities in Sweden` については、同窓会の支援活動を促進する上で、`日本における大学教育` ほか会員の共通の関心のあるテーマやトピックについて、当センターで日本人講師を招いての講演会を行うなど、会員の興味のもてる企画を実施することが重要であると語られました。また、将来の活動については、今年の5月の幹事会での合意事項の実施に向けて、活動領域をストックホルムから、ヨーテボリ、ルンドなど会員のいる地域に広げて、地域間で同窓会会員のネットワークを形成していくことを期待されており、今後このような意見をフィードバックし、当センターの活動の促進につなげていくことが重要であると思われました。



(実験器具)

約1時間に及ぶインタビュー後、研究施設の現場を紹介していただきましたが、最先端の器具が使用目的や使用者別(教授、ポスドクの学生など)に設置されており、このほか、同8階にはヨーテボリ市内が一望できる絶好のロケーションに、「ミーティングルーム」があり、絵画展示や図書があるリラックスできる雰囲気の中で、意見交換ができるスペースが確保されている点は、スウェーデンの研究環境の良さであると思われました。また、今回のインタビューは、瑞日の研究環境の違いや、両国の大学教育の比較や考察を行う大変よい機会となり、今後の研修課題となりました。(土屋)

## 7月30日(金)第4回`JSPS Alumni Club in Sweden` 同窓会会員へのインタビュー -

### ~インタビュー者の紹介~

**Prof. Magnus Willander 氏(1948年7月2日生、スウェーデン人)**  
**ヨ - テボリ大学/チャルマ - ス工科大学 物理学科、教授**



- 1)研究分野:半導体物理学、バイオテクノロジー、ナノサイエンスほか
- 2)博士の学位: 1984年、王立工科大学で「物理学」の博士号取得。
- 3)JSPS 事業での渡日経験
  - ・ JSPS フェロ - シップ事業

2002年10月に、外国人研究者招へい(短期)事業で渡日。東京工業大学で、受入研究者の小田俊理先生をはじめ研究協力者や大学院生と「ナノ構造量子効果デバイスの動作理論解析」の研究討議、意見交換ほかシンポジウムに参加。フェロ - 期間約1ヶ月。



(チャルマース工科大学物理学部を示す Prof. Magnus Willander 氏)

7月30日(金)、チャルマ - ス工科大学において、Stig G.ALLENMARK 氏に引き続き、

午後12時40分から、同窓会会員で現在ヨ - テボリ大学/チャルマ - ス工科大学の物理学科教授である Magnus Willander 氏をインタビュー - しました。同氏は、モデル計算の専門家として世界的に著名な方で、実験と理論の相補的な強力関係によりナノ構造量子効果デバイス研究の推進を図っており、これまで中国、インド、ロシア、米国、オーストラリア、南アフリカなど幅広い地域の研究者と共同研究をされており、日本とは、1999年、東京工業大学の小田俊理先生の紹介で、客員教授として同大学ほか(株)日立製作所製作所で約7ヶ月の長期に及び共同研究を実施し、その後2002年にJSPS 外国人招へい(短期)事業で再訪し、引き続き日本の研究者と「ナノ構造量子効果デバイスの動作理論解析」の研究討議・意見交換をされています。

Magnus Willander 氏は、JSPS フェロ - シップ事業での成果として、以下の5点を挙げられました。量子デバイスの共同研究の進展、研究室の活性化・大学院生の研究意欲の促進、研究協力者のいる大阪大学、東北大学を訪問し、各大学の研究環境を視察し、日本の大学の研究設備の充実に感銘を受け、将来にわたる国際共同研究の展望が開けたこと、「2002 未来の電子デバイス」のシンポジウム等に参加し、NTT や東芝ほか産業界の関係者と両国の共同事業、企業と大学の研究環境の比較、特許の問題等様々な分野にわたる意見交換、情報交換を行なうことができたこと、



(Magnus Willander 氏の同僚から別棟にある研究施設の概略説明をしていただきました。)

を通じて、日本という国、日本のサイエンスやテクノロジーに対する理

解度が深まったこと。同氏の話から、当事業を通じ、約一ヶ月の短い滞在期間中に、日本への理解が深まり、将来の国際共同研究につながる人的・研究ネットワークの構築が期待できる渡日経験であったことが伺えました。



(日本製の研究設備)

また、当 JSPS フェロ - シップ事業制度については、帰国後に渡日経験をフィードバックすることにより、瑞日の共同研究の促進や瑞日の研究者交流の活性化になるすばらしい事業であると高く評価され、このような国際交流事業に対して、母国のスウェーデン政府も共同で財政支援を行なうべきであるとおっしゃいました。さらに、JSPS 事業への要望として、教授レベルの場合、母国での研究や家庭との両立を図る上で一時帰国せざるをえない状況があり、現在、一定の条件付きで認めている「一時出国制度」以外に「分割滞在」を許可するなど制度の柔軟化と、滞在費等の支給経費の充実を期待されていました。

Magnus Willander 氏は、フェロ - シップ事業後も引き続き、受入研究者の小田先生ほか日本の研究者と共著論文を執筆し、シリコン量ドットを活性領域とする短チャンネルトランジスタ、ナノ結晶シリコンを蓄積ノードとする単電子メモリデバイス等で本格的な共同研究を推進しています。同氏は、他の国と比較して、日本との共同研究、研究者交流は No.1 であると賞賛され、理由として、日本人のフレンドリーな人柄、日本人研究者とのハイレベルの共同研究、充実した財政支援、安心した生活が保証される治安の良さなどを挙げられました。



(研究設備を説明している様子)

さらに、JSPS Alumni Club in Sweden については、JSPS フェロ - シップ事業の普及活動を通じて、当センターのプレゼンスを一層高めていく必要があるとおっしゃり、同窓会活動としては、フェロ - シップ事業を通じての渡日経験談を会員に広く公開し、情報提供を行い、瑞日の共同研究の促進につなげることが重要であるとおっしゃいました。また、今回のインタビューを契機にコンタクトパーソンになることを快く受け入れていただき、今後はコンタクトパーソンとして当センターと緊密に連絡をとりながら、協力して同窓会活動を支援していく旨を確認しました。

約 1 時間半に及ぶインタビューの後で、Magnus Willander 氏の同僚に、別棟にある研究施設に案内していただき、作業服を着て研究設備の概略を説明していただき、大規模かつ最先端の設備の中で研究が行なわれている様子を垣間見ることができました。(土屋)

### 【編集後記】

7 月から 9 月にかけて同窓会暫定役員のインタビューを実施し、JSPS 事業経験者の生の意見を聞くことで、JSPS 事業が瑞日の共同研究の促進や研究者交流の活性化につながる重要な役割を果たしていることを再認識し、今後、事業経験者の要望をフィードバックし JSPS 事業全体の改善につなげていくと共に、当センターの同窓会支援に対する今後の活動に期待している会員が多くいるなか、役員と協力し、両国の研究者交流の促進につながるよう活動を徐々に充実させていきたいと思えます。また、同窓会会員ほか 8 月下旬「Euro Science Open Forum」で JSPS プ - スに来訪された世界各地の研究者の多くがフェロ - シップを中心とした JSPS 事業への関心度が高いことをうけて、当センターで今後も引き続き、普及活動を積極的に行なっていくことが重要であると思えます。(土屋)

監 修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センター - 長 E-mail: [t-okazaki@jpsps-sto.com](mailto:t-okazaki@jpsps-sto.com))  
編 集 長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センター - 事務官 E-mail: [i-mizuta@jpsps-sto.com](mailto:i-mizuta@jpsps-sto.com))  
編 集 担 当: 土屋 友紀 (研修生 E-mail: [gakushin3@jpsps-sto.com](mailto:gakushin3@jpsps-sto.com))  
執 筆: 岡崎 恒子、水田 功、土屋 友紀、澤登 ゆり子 (研修生 E-mail: [gakushin2@jpsps-sto.com](mailto:gakushin2@jpsps-sto.com))

JSPS Stockholm office, Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 (0) 8 5088 4561 FAX +46 (0) 8 31 38 86 <http://www.jpsps-sto.com>